



Title	国際遠隔教育プログラムによるグローバル人材育成と多文化共修の推進：大阪大学「世界は今—カリフォルニアから—」「世界の事情を英語で学ぶ」を中心に
Author(s)	張, 希西
Citation	大阪大学高等教育研究. 2025, 14, p. 55-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102852
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国際遠隔教育プログラムによるグローバル人材育成と 多文化共修の推進

— 大阪大学「世界は今—カリフォルニアから—」「世界の事情を英語で学ぶ」を中心に —

張 希西^{※1}

Enhancing Global Workforce Development and Intercultural Learning through an International Distance Learning Program: A Case Study of “Current World Affairs” and “Global Studies in English”

ZHANG Xixi^{※1}

本稿は、20年間にわたって北米の大学や産業界および本学の同窓生と協力して実施してきた大阪大学の遠隔授業「世界は今—カリフォルニアから—」「世界の事情を英語で学ぶ」を事例に、グローバル人材の育成と多文化共修の観点から考察したものである。この遠隔授業の実施背景、コースデザイン、実施成果に焦点を当て、日本の高等教育コンテキストにおけるグローバル人材の育成と多文化共修に対する国際協働教育プログラムの有効性を示唆する。

日々変化しつつある国際社会と産業界に目を向け、文理融合した学際的な専門知識を取り入れたカリキュラムは、学生たちに海外に行けなくても世界を身近に感じさせ、異文化や多様性の理解を深めるとともに、批判的思考能力、コミュニケーション能力、複雑なグローバル問題に対処する能力を育む機会を提供する。受講生と講師とのインター・アクティブな交流を促進するために、Zoomのチャット、ブレイクアウトルーム、投票、注釈機能などを活用し、毎週学んだ内容を振り返って自分の意見と感想を述べるレポートを課す。また、学生の受講動機、学習プロセス、コースの実施効果を評価するために、事前アンケートと授業後アンケートを実施し、学生の個人意見や感想を中心とした一部のレポートもあわせて分析した。

考察の結果、受講生は国際社会や産業界、学界を含む多様な文化および国際的な環境に対する理解の向上を実感していることがわかった。また、仲間との討論に積極的に参加し、多様な講演者に触れることで、自分の感想や意見を自由に述べる機会があり、受講生からは批判的思考能力、コミュニケーション能力、表現力が向上したというフィードバックを得た。授業後に行われた短いレポートによって、これらの能力がさらに強化された。加えて、異文化や多様性への視野が広がり、理解を深めることで、学生のキャリアパスへの意識が高まり、将来の進路をナビゲートすることにも貢献している。

キーワード：遠隔教育、グローバル人材育成、多文化共修、大阪大学

This study explores a successful distance learning model implemented by a Japanese national university over the past 18 years, emphasizing a collaborative approach with universities and industries primarily in North America. The model, adaptable to synchronous and asynchronous learning methods, has evolved in response to the challenges posed by the pandemic. The case study delves into the program's design, its adaptations in the post-pandemic era, and its impact on nurturing students' global competence within the Japanese educational context.

所 属：^{※1}大阪大学 学際大学院機構 博士課程教育リーディングプログラム 超域イノベーション博士課程プログラム部門

Affiliation：^{※1}The University of Osaka Institute for Transdisciplinary Graduate Degree Programs Cross-Boundary Innovation Program Office

連絡先：sissizhang.itgp@osaka-u.ac.jp (張 希西)

Situated at the crossroads of international education and higher education partnerships, the course aims to cultivate students' global competence by providing insights into "Current World Affairs" and "Global Studies". Drawing expertise from academia, industry, and civil society worldwide, the curriculum equips students with essential skills and knowledge to navigate an interconnected world. Emphasis is placed on fostering critical thinking, cultural intelligence, and the ability to engage with complex global issues. To facilitate interaction among students and instructors, the university's learning management system and online platforms, including Zoom's chat, breakout rooms, polling, and annotation features, are utilized throughout the course. An analysis of students' learning processes, motivations, and outcomes is conducted through examination of course reports and responses to a short survey administered during the program.

Findings reveal that students perceive improvements in their understanding of diverse cultures, including industry, academia, and civil society working cultures. This expanded perspective enhances their awareness of potential career paths beyond domestic companies. Through active participation in discussions with peers and exposure to diverse speakers, students report enhanced communication skills, bolstered by short assignments conducted during and after the course.

Keywords : Distance Learning, Global Workforce Development, Intercultural Learning, The University of Osaka

1. はじめに

近年、高等教育における国際化の概念は大きく進化し、従来の学生流動性に依存するモデルから、国内における異文化学習、多文化共修の機会創出を含むより包括的なアプローチへとシフトしている。これにより、学生は物理的な移動を伴わずとも多文化的な学びを得ることが可能となり、国際化はより包括的で、公平なアプローチへと転換を遂げている。本稿では、これらの背景を踏まえ、日本における国際化の政策や課題についても触れつつ、特に大阪大学の遠隔授業の事例を通じて、異文化理解や批判的思考能力、コミュニケーション能力など、グローバル人材の育成に向けた取り組みの重要性を探る。

2. 国内（キャンパス内）における国際化、カリキュラムの国際化とグローバル人材育成について

高等教育における国際化の概念は大きく進化しており、「海外における国際化」と「国内における国際化」の双方を包含するものとなっている（Knight, 2008）。従来重視されてきた学生の流動性は依然として重要であるものの、近年の大学はすべての学生が享受可能な異文化学習の機会を創出する方策を模索している（Gregersen-Hermans, 2017）。その具体的な取り組みとして、「国内（キャンパス内）における国際化」（Internationalisation at Home:

IaH）や「カリキュラムの国際化」（Internationalisation of the Curriculum: IoC）があり、包括的な教育・学習実践を通じてグローバルかつ異文化的な能力の涵養を目指している（Beelen & Jones, 2015; Leask, 2015）。

IoCは、国際的および異文化的視点を授業内容と教授法に組み込むことを重視し、学生が物理的な移動を伴うことなく文化的に多様で豊かな学習体験を得ることを可能にする（Leask, 2009; Luxon & Peelo, 2009; Bodycott et al., 2014; Abdul-Mumin, 2016）。これらの取り組みは、移動性中心の国際化から、より包括的かつ公平なアプローチへの転換を示し、より広範な教育目標とも整合するものである。

日本においては、政府の政策として学生の流動性、国際的な教育連携、そしてグローバル大学ランキングへの対応が国際化の主要な手段として位置付けられてきた（Ota, 2018）。これらの施策の結果、短期留学プログラムへの参加者数は著しく増加し、2009年から2016年にかけてその数は2倍以上に増加した。とりわけ1か月未満の短期プログラムが全体の62%を占めている（文部科学省, 2017）。一方で、学位取得を目的とした長期留学は減少傾向にあり、単位互換を伴う短期留学への移行が進んでいる（McCrostie, 2017）。

しかしながら、こうした動向にもかかわらず、学生の海外留学には依然として複数の障壁が存在している。経済的負担、帰国後の就職への不安、内向き志向の強さなどが、留学率の伸び悩みに影響を及ぼしている。また、

言語能力に関する不安や日本の充実した社会保障制度の安心感も、学生の海外志向を抑制する要因となっている。2019年の内閣府調査によれば、13歳から29歳の若者の過半数が留学の意思を持たないと回答しており、これは国際的な傾向とは対照的である。

さらに、パンデミックはこうした課題に拍車をかけ、海外留学の増加傾向は一時的に停滞した。徐々に回復が進む中、日本政府は今後10年間（2023年～2033年）にわたり、オンライン型やハイブリッド型プログラムを含む新たな施策を展開し、海外からの留学生受け入れと日本人学生の海外派遣の双方を強化し、国際化された教育環境の構築を目指している（文部科学省、2024）。

これらの政策の中心的な目標は、「グローバル人材」の育成にある。すなわち、語学力やコミュニケーション能力、異文化理解、そして日本人としてのアイデンティティを兼ね備えた人材の育成である。この「グローバル人材」に関する概念は、「グローバル人材育成推進会議」（2011）により提示され、自律性、柔軟性、多様な文化的環境に積極的に関与する姿勢の重要性が強調されている。研究によれば、語学力や異文化理解を含むこれらの能力を効果的に涵養するためには、少なくとも6か月以上の留学期間が必要であるとされている（Ota, 2018）。

このように、日本の高等教育機関は、学生の海外派遣の拡大と同時に、IaHやIoCといった国内施策の充実を図るという二重の課題に直面している。これら相互に関連する要素に取り組むことによって、日本は、ますます相互依存が進む国際社会において学生が活躍できる力を養う、ダイナミックな教育体系の構築を目指している。

3. 国際遠隔教育プログラムについて

パンデミックは、日本の国際化活動、特に従来は物理的な移動に依存していた活動に多大なる影響を及ぼした。これに対応するため、大阪大学を含む全国の大学においては、遠隔教育が以前より多く、積極的に導入されるに至った。この転換は、パンデミックの影響を緩和するのみならず、インクルーシブでアクセス可能な国際教育の新たな機会を創出することにもつながったのである。

日本における遠隔教育は、グローバル人材育成を促進するための重要な手段となっている。参加の障壁が低くなることにより、学生がコミュニケーション能力、協働力、多言語運用能力といった重要なスキルを習得するための柔軟なプラットフォームを提供している。このよう

なアプローチは、今日のグローバル化した労働市場において求められる能力を学生に育成するのに役立っていると考えられる。

大阪大学においては、遠隔教育プログラムは当初は限られていたが、次第にその範囲と重要性が増してきた。特に、本学の北米拠点や北米同窓会などの海外ネットワークを活用し、提供される遠隔講義などの取り組みは、学生に海外および日本で活躍している専門家や仲間と交流する機会を提供している。

パンデミックの間に、Zoomミーティングや大学の教育学習支援情報システム（Collaborative Learning Environments, CLE）などのツールを使用した完全オンラインプログラムへの迅速な移行は、こうした機会をさらに拡充する契機となった。この転換は、より国際化された教育環境を促進する上で重要な役割を果たし、「グローバル人材」の育成という国の広範な目標にも合致するものである。すなわち、多文化共生社会および急速に変化するグローバルな環境において求められるスキルを備え、活躍できる人材の育成を目指しているのである。

4. 事例研究

本事例研究は、大阪大学の海外拠点部門（北米拠点）が主担当して実施する遠隔授業、「世界は今—カリフォルニアから—」と「世界の事情を英語で学ぶ」の二つの科目に焦点を当てて考察したものである。これらの科目は、便利な学習プラットフォームとインタークティブな教授法を活用し、学生に国際教育、多文化共修の機会を提供する継続的な取り組みの一環として位置付けられている。本教育実践報告では、プログラムの概要（実施背景とコースデザイン）、近年実施したアンケート調査の結果、学生のフィードバックと遠隔授業担当者の振り返りを含む文書分析を通じて、この国際遠隔教育プログラムの実施成果、およびグローバル人材育成と多文化共修を推進する有効性を検証する。

4.1 コースの実施方針と体制

対象となる二つの科目は、それぞれ異なる内容と方法論に基づいて構成されている。「世界は今—カリフォルニアから—」は春夏学期に日本語で実施され、「世界の事情を英語で学ぶ」は秋冬学期に英語で開講されている。両科目とも、学生の批判的思考力、コミュニケーション能力、そして異文化理解力の育成を目的としている。

これらの科目は、2005年から2019年まで、学内教室および大阪大学北米拠点の現地オフィスに設置されたビデオ会議システムを活用して実施されていた。学生同士の主体的な参加と交流を促進するために、Collaborative Learning Environment (CLE) も併用されていた。2020年以降は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、ZoomミーティングとCLEを活用した完全オンライン形式へと移行した。この変更により、同期型（リアルタイムの授業）と非同期型（事前学習と事後学習）の双方を組み合わせ、より柔軟な参加が可能となっている。基本的に、毎回の授業はリアルタイムで実施しているが、授業終了後には録画がCLEのコンテンツにアップロードされ、学生は復習用としてオンデマンドで視聴することができる。パンデミック終息後の現在も、このようなオンライン体制は維持されているが、春夏学期に行われる15回の授業のうち、担当講師の要望により2回程度、全員が教室に集まり、対面で実施されることもある。

受講生と講師とのインテラクティブな交流を促進するために、Zoomのチャット、ブレイクアウトルーム、投票、注釈機能などを活用し、毎週学んだ内容を振り返って自分の意見と感想を述べるレポートを課す。この設定は「世界は今—カリフォルニアから—」と「世界の事情を英語で学ぶ」の2つの講義に共通しているが、授業によって使われる機能が異なることがある。春夏学期に日本語で開講される「世界は今—カリフォルニアから—」では、Zoomのチャット機能や投票機能がよく使用され、授業内容によっては注釈機能が活用されることもある。例えば、音韻学に関する講義では、日本語における一部の鼻音や破裂音を、学生が国際音声記号表（英: International Phonetic Alphabet chart）上に注釈機能を使ってマークすることで、理解を深めている。一方、秋冬学期に英語で開講される「世界の事情を英語で学ぶ」では、学生の英語の会話力、多様な背景をもつ学生同士の議論と意見交換を通じて批判的思考力を向上させために、ほぼ毎回の授業ではZoomのブレイクアウトルーム機能が使用され、グループディスカッションを行っている。

本稿では、「異文化学習」「多文化共修」および「異文化理解」という三つの概念を取り上げた。これらは相互に関連しながらも、それぞれ異なる文脈や使用場面において用いられる概念であり、本稿ではその違いを意識して使い分けている。「世界は今—カリフォルニアから—」は、主に日本人学部生、特に新入生の受講が多く、留学

経験者や留学生の割合は比較的低い。しかしながら、北米在住経験を有する本学同窓生や実業家などが講師として登壇することで、学生は海外の実情に基づいた具体的な知見や講師の経験に触れ、自らが属する社会の文化との比較を通じて、異文化への理解を深めることができる。この授業は、主に「異文化学習」の場として機能している。一方、「世界の事情を英語で学ぶ」は英語で開講されているため、受講者には留学生や海外経験のある学生が多く、講師陣も北米の大学に所属する外国人教員が中心である。このように多様な文化的背景をもつ講師および受講生との双方向的なやり取りを通じて、学生同士の多文化的な視点の共有や協働的な学習が促進されており、「異文化学習」と同時に「多文化共修」の場としても機能している。このように、性格の異なる二つの遠隔授業が、それぞれ異文化学習および多文化共修の機会を提供することによって、学生の異文化や多様性に対する視野を広げ、理解を深めている。これにより、学生の異文化理解力の実質的な育成に寄与していると言える。

4.2 コースデザインと近年の実施状況

「世界は今—カリフォルニアから—」は、春夏学期に日本語で開講される講義であり、主に学部生（特に新入生）を対象としている。講義では、企業経営者、研究者、作家、組織や国際機関のリーダー、スタンダップコメディアンなど、各分野で活躍する専門家を講師として招へいされ、各界における実践的な知見が提供される。多くの講師は国際的な経験を有しており、学生は世界における成功事例・失敗経験や多様な視点に触れる機会を得ることができる。講義を通じて、学生は自身の人生目標や将来のキャリアについて考えるとともに、現代の国際情勢に対する柔軟な、批判的な思考姿勢を養うことが求められる。

受講者数は年度によって変動するが、近年は増加傾向にある。たとえば、2021年度には140名、2022年度には98名、2023年度には178名が履修し、2024年度には187名に増加した。

「世界の事情を英語で学ぶ」は、秋冬学期に英語で開講される講義であり、全学年の学生を対象としている。本授業は、批判的思考力、英語でのコミュニケーション能力、問題解決能力の向上を目的とともに、カリフォルニア大学やスタンフォード大学といった世界的に著名な大学の教員による講義を通じて、国際的な学術成果に触れる機会を提供するものである。しかしながら、国際的な視野を重視しているにもかかわらず、この授業

科目名	学期	2020 秋冬	2021 春夏	2021 秋冬	2022 春夏	2022 秋冬	2023 春夏	2023 秋冬	2024 春夏	2024 秋冬
世界は今—カリフォルニアから—			140		98		178		187	
世界の事情を英語で学ぶ		53		23		20		16		23

図1 近年の受講生数

の履修者数は「世界は今—カリフォルニアから—」に比べて遙かに少ない傾向にある。たとえば、2021年度の履修生は23名、2022年度および2023年度の履修生はそれぞれ20名と16名にとどまり、2024年度には23名へとわずかな回復を見せた。

「世界の事情を英語で学ぶ」の履修者数が「世界は今—カリフォルニアから—」と比較して少ない理由としては、英語運用能力の向上に特化した授業内容や、より学術的な性格を有する点が挙げられる。実際に本授業を履修した学生は、すでに留学を決意しているか、あるいは最近留学から帰国した者が多く、国際経験を有する学生にとって魅力的な授業となっていることがうかがえる。

この二つの遠隔授業では、留学生や海外留学経験のある学生も含め、多様な背景をもつ受講生同士のグループディスカッション、講師による多様で斬新な視点からの講義、そして毎回の講義後に自らの考えやコメント、感想をリフレクションする課題レポートを通じて、学生に多角的に考える習慣、問い合わせを立てる力、そして問題解決に向けた姿勢を育てることを、コースデザインの中心に据えてきた。これにより、学生の批判的思考力の向上が期待されると考えられる。

毎回90分の授業の進行は、講義のトピックや内容、担当講師によって異なることがあるが、4.1で紹介したように、共通する部分や、それぞれに重点的に扱われる内容もある。例えば、「Thinking without Comparison Is Unthinkable: Why We Must Travel」という授業では、「海賊か英雄か? 比較は多面的解釈の可能性を開く」にあるストーリーを例に取り上げ、同じ人物であっても、国によっては海賊と見なされたり、英雄と見なされたりと、全く異なる視点から解釈が分かれることを学んだ。ブレイクアウトルームによるグループディスカッションでは、学生が「解釈が分かれる他の問題についても考えてみよう」について議論・意見交換を行い、メインルームに戻ってからは、それぞれのグループで取り上げた例について全体で共有した。食事のマナーや、同じ人物・事件に対する認識など、解釈が分かれる例が多く挙げられた。その後のレポートにおいても、学生たちは同じ課題について、講義内容や学生同士のディスカッ

ションを振り返りながら、より多くの例を挙げて書いた。このように、講義、ディスカッション、発言（意見共有）、そしてレポートによるリフレクションを有機的に組み入れ、学生が物事、出来事、国際情勢に対して柔軟かつ批判的な思考姿勢を養うことを学習目標に据えている。

4.3 コースの評価について—アンケート調査などによる考察—

20年間にわたって実施してきたものの、遠隔授業「世界は今—カリフォルニアから—」と「世界の事情を英語で学ぶ」の授業評価は継続的に、一元的に行われたものではない状況である。筆者は完全オンライン形式へと移行した後の5年間を担当したが、評価基準の策定と評価の実施は3年前からのものであり、より系統的に追跡し、実施成果を検証する必要がある。とは言え、本教育実践報告は、近年の資料とデーターの考察に基づき、この国際遠隔教育プログラムの実施成果、およびグローバル人材育成と多文化共修を推進する有効性を検証できたものである。

各授業の前後（新学期のオリエンテーションのとき、と最終回の授業が修了した後）にアンケート調査を実施し、履修生の受講動機、期待、達成度を評価した。2023年度と2024年度「世界は今—カリフォルニアから—」の事後アンケートにおいては、「海外にいる／いた多様なバックグラウンドを持つ講師の経験を知りたいから」(32票)、「自分のキャリアプランを考えるうえで役立ちそうだから」(22票)といった受講理由が多く挙げられた。一方で、「コミュニケーションスキルを向上させるために」や「海外で就職することを考えているから（国際的なキャリアの追求）」に対する関心は比較的低かった。一方で、2023年度と2024年度「世界の事情を英語で学ぶ」の事前と事後アンケートでは、「英語の会話力を向上させるために」(29票)、「海外にいる／いた多様なバックグラウンドを持つ講師の経験を知りたいから」(25票)、「学問的に挑戦的であり、学術的な内容が豊かであったから」(23票)という関心が多く寄せられたが、「自分のキャリアプランを考えるうえで役立ちそうだから

ら」や「コミュニケーションスキルを向上させるために」に対する関心はそれほど高くはなかった。

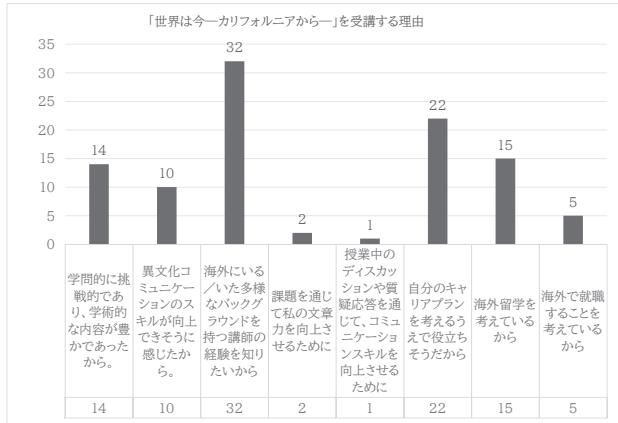


図2 「世界は今一カリフォルニアから」を受講する理由

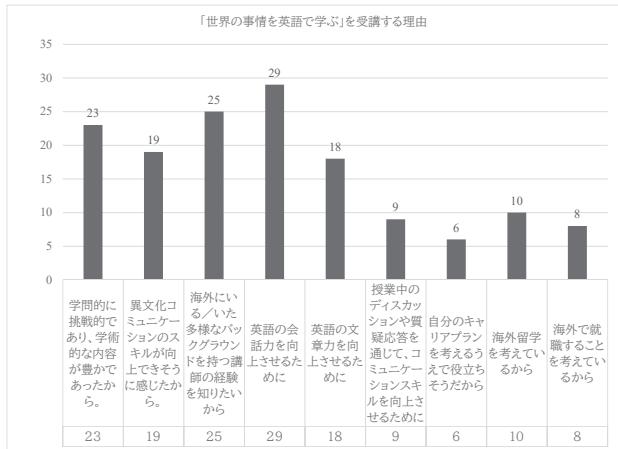


図3 「世界の事情を英語で学ぶ」を受講する理由

学習成果に関しては、「世界は今一カリフォルニアから」を例に、受講生の大多数が、期待した目標を達成できたと感じており、「この授業を通して、身につけるべきものとして期待された学習成果が得られた」という項目に、「必要なスキルを身につけることができた」と回答した者は全体（回答者71名）の88%（「かなりそう思う」44%、「ややそう思う」44%）にのぼった。具体的には、文章力、創造的思考能力、論理的思考能力の向上が顕著であり、また、他人と交流する能力（相互交流）、自分で考えて積極的に行動する能力（主体性）、口頭でのコミュニケーション能力の改善も見られた。受講動機に、コミュニケーションスキルの向上に対する関心はそれほど高くはなかったものの、実際に、授業中のディスカッションと発言を通じて、改善できたのである。

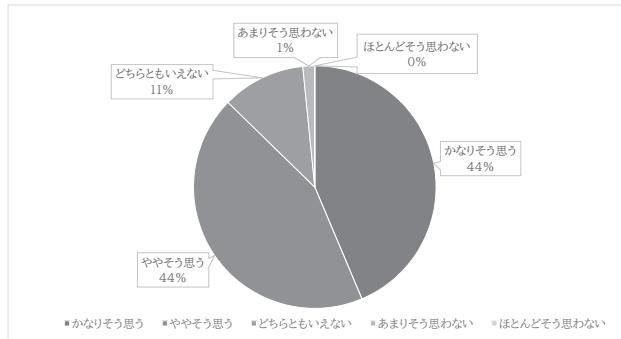


図4 2023年度と2024年度「世界は今一カリフォルニアから」の受講満足度

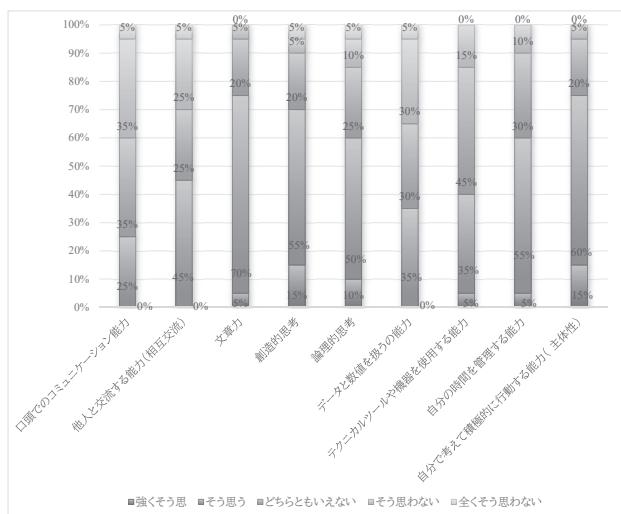


図5 2023年度「世界は今一カリフォルニアから」の学習成果

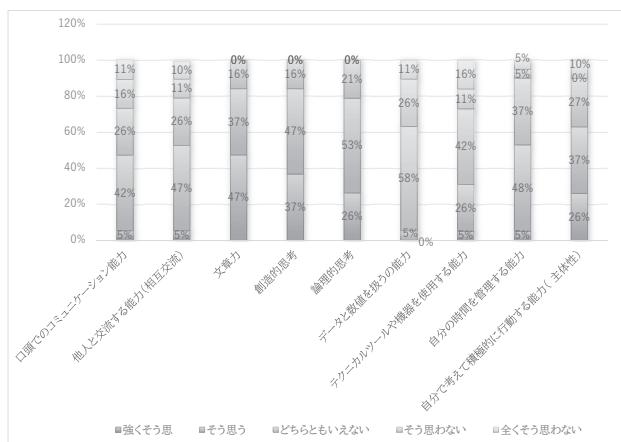


図6 2024年度「世界は今一カリフォルニアから」の学習成果

アンケートとともに学生に自由記述のコメントを記載してもらったが、多くの学生が、「新たな挑戦への意欲を喚起し、将来を考えるきっかけとなった」といった感想を寄せている。

「世界で活躍している多様な背景を持つ方々のお話を聞

く機会があり、とても刺激を受けました。自分の視野が広がったと感じています。大学生活の最初の学期にこの授業を受けることができて本当によかったです。これからさまざまなものに挑戦する勇気をもらいました。」

「この授業を聞いて、将来の自分の人生について考える良い機会になりました。」

「人それぞれ人生を歩む道は異なるのだと強く感じるとともに、どの講義も自分自身の将来について考えさせられる内容でした。」

「さまざまな生き方についての気づきを得ることができ、グローバルな世界に踏み出そうとしている自分にとって非常に有意義で貴重な授業でした。」

「この講義を受けて、自己評価の重要性を改めて実感しました。」

これらのアンケート結果およびレポートの予備的な分析から、受講生は、多様な講師陣との交流や、自身の将来やキャリアについて考える機会に強い動機を抱いていたことが示唆される。

両コースともに肯定的な評価を受けているものの、学生の動機や受講状況の違いから、各授業内容や提供方法をよりきめ細かく調整する必要性が示されている。「世界は今—カリフォルニアから—」はオンライン授業への移行により参加者が増加したが、「世界の事情を英語で学ぶ」における受講者数の伸び悩みについては、引き続き施策を要する。今後、さらなるアンケート分析および学生からのフィードバックを踏まえ、両コースを一層改善し、学生のグローバルな視野とスキルの育成に資する内容とすることが求められる。

4.4 考察の結果から考えて

日本語と英語のコースを前期と後期に分けてワンセットのシリーズコースとして統合することは、グローバル人材を育成するうえで極めて重要である。しかしながら、前述したように、両科目的履修者数には顕著な差が生じており、この大きな差異は、英語で行われる授業に対して学生が関心を持ちにくい、あるいは履修に対して躊躇している可能性を示唆している。

履修者数の違いはあるものの、両科目的学生に共通して見られる動機として、異なる背景を持つ講師から学びたいという強い関心が挙げられる。一方、キャリア観や語学力向上に関する動機には相違が見られる。興味深いことに、英語で実施される「世界の事情を英語で学ぶ」は留学を促進することを目的として設計されているもの

の、実際には既に留学することを決めている学生や、留学から帰国したばかりで英語力やコミュニケーション能力をさらに高めたいと考える学生が主に履修している状況である。

このような国際遠隔教育プログラムは、学生と大学の双方にとって有益である。学生にとっては、多様な背景を持つ学生や講師との議論を通じて自己を見つめ直し、キャリアを再考する機会となる。一方、大学にとっては、グローバル人材を育成する環境づくりに寄与している。このような環境は、学生の語学力やコミュニケーション能力の向上を促すのみならず、異文化理解を深め、自ら挑戦し続ける姿勢を養う一助となっている。

ほかの教育モデルとの比較を行うことで、これらの科目をさらに改善することが可能であると思われる。遠隔学習は、グローバル人材を育成するための重要な手段として引き続き活用されるべきであり、その需要は今後ますます高まると考えられる。加えて、遠隔学習は「キャンパス内の国際化（Internationalisation at Home, IaH）」の有効なツールとなり、「お試し留学」の位置付けとして、留学の前段階としての役割も果たすことができる。

4.5 今後の課題

本学の国際化を一層推進するためには、教職員と学生の双方にとって国際交流がどのような役割を果たし、どのような価値をもたらすのかを明確にし、関係者同士で共有することが課題である。特に、海外大学や海外同窓会との連携を活用した遠隔授業は、グローバルな視野を養う貴重な機会であり、その意義を学内でより広く浸透させる必要がある。また、過去数年間、この遠隔講義が事務職員研修の一環としても実施されたことから、教職員全体の国際対応力の強化という観点でも、こうした試みを継続的に拡充していくことが求められる。さらに、これらの取り組みを通じて得られた知見をもとに、国際遠隔教育プログラムの質の向上と体系化を図り、より多くの学生・教職員が国際的な学びと成長の機会を得る環境の整備が課題となる。

5. 結び

本稿では、大阪大学が約20年間にわたり実施してきた遠隔授業「世界は今—カリフォルニアから—」と「世界の事情を英語で学ぶ」を事例に、グローバル人材の育成と多文化共修の観点からその意義と効果を検討した。北米の大学や産業界、同窓生との連携により展開される

本授業は、物理的な移動を伴わずに異文化理解を深める機会を学生に提供し、批判的思考力やコミュニケーション能力の向上に寄与していることが明らかになった。これらの成果は、学生が国内、キャンパスにいながら国際的な視野を広げ、自身のキャリア形成に対する意識を高める契機となることを示している。

教育効果の持続性という観点からは、授業終了後も学生が得た知識や経験をどのように日常的な学びや将来の活動へと接続していくかが重要である。本授業のような国際協働プログラムは、単発の学習機会にとどまらず、継続的な学びやネットワーキングの基盤を築く役割を果たし得る。今後は、フォローアップの仕組みや卒業生との連携強化を通じて、学びの効果を長期的に維持・発展させる方策を検討することが求められる。

受付 2025.4.14／受理 2025.7.25

謝辞

遠隔授業「世界は今—カリフォルニアから—」と「世界の事情を英語で学ぶ」の運営と実施にあたり、担当講師の先生方、北米同窓会、グローバルイニシアティブ機構、国際部、全学教育推進機構をはじめ、多くの教職員から多大なご協力をいただいた。ここに深く御礼申し上げます。

参考文献

岩居弘樹 (2009) 「サンフランシスコからの遠隔授業」『大阪大学教育実践センター紀要』5. 59-62.

岩居弘樹・家島明彦・樺澤哲・東澤悠宇・阪本陽子・山口和也 (2017) 「日米間遠隔授業におけるスマートフォン対応授業支援アプリの利用による双方向性コミュニケーションの向上」『大阪大学高等教育研究』5. 57-62.

久保井亮一・松山明江・南さやか・岩居弘樹・松河秀哉 (2012) 「サンフランシスコからの遠隔講義：早期留学のすすめ」『大阪大学大学教育実践センター紀要』8. 41-44.

スコット・ノース (2007) 「海賊か英雄か？比較は多面的解釈の可能性を開く」『実践的研究のすすめ：人間科学のアリティ』. 30-32.

文部科学省 (2014) 「若者の海外留学を取り巻く現状について」
<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku/dai2/sankou2.pdf>

文部科学省 (2017) 「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」成果報告書
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2018/11/22/1411310_1.pdf

文部科学省 (2024) 「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ<J-MIRAI>」（第二次提言）概要
https://www.mext.go.jp/content/20240704-mxt_kotokoku02-000036923-08.pdf

Abdul-Mumin, K. H. H. (2016) The process of internationalization of the nursing and midwifery curriculum: A qualitative study. *Nurse Education Today*, 46, 139-145.

Beelen, J., & Jones, E. (2015) Redefining Internationalization at Home. *The European Higher Education Area*, 59-72.

Bodycott, P., Mak, A.S. & Ramburuth, P. (2014) Utilising an Internationalised Curriculum to Enhance Students' Intercultural Interaction, Engagement and Adaptation. *The Asia-Pacific Education Researcher*, 23, 635-643.

Gregersen-Hermans, J. (2017) Intercultural competence development in higher education. *Intercultural competence in higher education*, 67-82.

Knight, J. (2008) Higher education in turmoil: The changing world of internationalization, 13.

Leask, B. (2009) Using formal and informal curricula to improve interactions between home and international students. *Journal of Studies in International Education*, 13(2), 205-221.

Luxon, T., & Peelo, M. (2009) Internationalisation: Its implications for curriculum design and course development in UK higher education. *Innovations in Education and Teaching International*, 46(1), 51-60.

McCrostie, J. (2017) Why Japanese universities aren't attracting international students. *The Japan Times*.

Ota, H. (2018) Japan's higher education policy for internationalization. *Asia Pacific Journal of Education*, 38(2), 137-150.

Petrovskaya, I., & Shaposhnikov, S. (2020) Enhancing intercultural effectiveness in international virtual student teams: an exploratory study. *Educational Research for Policy and Practice*, 19(3), 345-361.